

女子高生による水環境改善キャラバン

Blue Earth Project

1. はじめに～Social Design ProjectとBlue Earth Project.

松陰高等学校では、早期に進学が決まった生徒を中心に、「女子高生が社会を変える」をスローガンに、「Challenge Social Design Project (生徒からはチャレプロと呼ばれている。)」という全く新しいキャリア教育活動をおこなっている。

これは、高校生も社会の一員であるという自覚を持って、責任ある社会人として、世の中や人をプロデュースしたりデザインして、より良い社会作りにチャレンジしていく活動。具体的には、社会の中に自ら課題を見つけ、課題解決に向けて身近なアクションを考え、それを街に出て行って世の中の人に伝えていくという、全国に例を見ない全く新しいキャリア教育活動である。

過去11年間の活動で、生徒達が取り組んだテーマは、種々様々。中でも、環境や国際協力をテーマにグローバルな課題の解決を考え街中に広めていこうというのが『Blue Earth Project』。

ただ、同じ環境問題や国際協力の課題と言っても、Blue Earth Projectは毎年テーマを変えてきた。同じテーマにすると、過去の先輩のやり方に沿って活動してしまうこともありえるからだ。常に、チャレンジしていくことを大切にしてきた。ちなみに、今までにテーマとしてきたことは、「日本の森を元気にしよう。」「フェアトレードで児童労働をなくそう。」「温暖化STOP!」「環境と食問題」等々。

ただ、大切にしてきたことは、若者から大人に発信していく時の若者らしい発信の方法。まず、課題解決に向けて、身近で誰にでもできそうなアクションを考えてきた。課題は大きく、アクションは身近にである。たとえば、「間伐材の商品を買って、日本の森を再生しよう!」とか、「バレンタインデーはフェアトレードチョコを買って、児童労働をなくそう!」とか、「指先からできるエコ、それは

暖房の温度を20度にして、温暖化STOP!」、そして「お米を毎日食べて、水や生物にやさしい生活を」といったアクション。

2. 2009年度のBlue Earth Projectは

そして、2009年度、取り組んだ課題は「世界の水事情の改善」。そのための解決アクションとして選んだのが、ユニセフ協会が取り組んでいた「TAPプロジェクト」。これを関西で広めようということになった。

TAPプロジェクトは、レストラン・カフェを舞台に、通常は無料で提供される水やお茶に対して、任意で100円もしくはそれ以上の募金をいただくというもの。集まった募金は日本ユニセフ協会を通して、世界で「清潔で安全な水」を手に入れることのできない地域の子どもたちを支援する活動に使われる。具体的には、寄せられた募金は、衛生的な水の確保が難しい国で井戸を整備する事業などに使われる。簡単に言えば、「レストランのコップ一杯の水で、アフリカの子供たちに井戸を」というアクションだ。

ニューヨークから始まって世界的な活動になっているが、日本では2008年度に初めて東京で実施され、2009年度の夏には横浜で行われていたが、今まで全く行われていなかった関西で広めることに、Blue Earth Projectの生徒達39名が取り組むことになった。

3. まずはフィールドワークと課題学習

まずは、世界の水事情や日本の水事情について課題意識を明確に持つための学習会およびフィールドワークを繰り返した。

学習会には日本ユニセフ協会の方にも来ていただき、アフリカの厳しい水事情の実態に関して詳しく説明を受けた。

次に、奈良県吉野川上村で、野田岳仁様(世界的な水の権威)から、水問題を考えるワークショップをしていただいたり、以下のようなフィールドワークを通して、森が育む水の大切さを体で実感した。

- ・ 吉野川源流の奥深く入って行って、原生林から流れ出す美しい水を体感。
- ・ 現地の方々との交流を通して、水と暮らしの良い関係の知恵を知る。
- ・ 間伐を体験し、森が元気になることで、美しい水が生まれることを体感。
- ・ 乱開発によって、水質の著しい汚染が起きている吉野川源流を体感。
- ・ 大きなダム開発により、昔の水と暮らしの良い関係が損なわれてしまった現実も知る。
- ・ ミャンマーで使われている水桶を実際に使って、吉野源流の水を運んでみる。
- ・ 200年生の森に入って森に育まれた土壌で保水実験をし、土壌と水の良い関係を実感。
- ・ 生活における水問題(トイレ等)に関して、企業の方からお話をうかがい、暮らしの中の節水等の問題を学ぶ。



4. 繰り返した企画会議、そしてプレゼン。

世界の危険な水事情と日本の浪費過多の水事情に気付き、課題意識がついた後は、いよいよOUTPUTの段階に入っていった。TAPプロジェクトを広めていくことを通して、どのように世界の水事情を世の中に広めていくのか、その具体的な方法を何時間もかけて、チームに分かれて話し合った。そこには、女子高生らしいアイデアがたくさん出た。

そして、1月下旬、Blue Earth Projectの生徒達が、TAPプロジェクトを推進されている方々にプレ



ゼンする時がきた。東京から再びユニセフ協会の方が来られた。TAPプロジェクトをコーディネートされている広告代理店の方も、デザイナーの方も来られた。

そして、高校生らしいデザインのテーブルカードの提案を提案し、4チーム中2チームの案が採用。広報活動の協力もお願いしたが、それも快く引き受けられたりした。デザインカードは、TAPプロジェクトの協力店舗のすべてのテーブルに置いてもらうもので、食事をしながら、弾んだ会話の中で手元にあるそのカードを元に、世界の水事情をはじめ、自分達が訴えたいことが話題になる可能性が高い。そういうこともあって、彼女達は機械で印刷するのではなく、すべて手書きで、色鉛筆で塗っていくことにした。手間をかけたことが分かる分、本気度と共に自分達の思いがお客様に伝わると思ったからだという。

その後、幾つかのチームに分かれての企画会議は連日続いた。その中で、さらに多くの魅力的な活動計画が練られていき、準備も開始。毎日、早朝から夜まで自主登校が続いた。

5. 店舗への協力依頼

そして、いよいよ、Blue Earth Projectの本質的ともいえる活動が始まった。合言葉は「町じゅうをBlueに染めよう!」

具体的には、Blue Earth Projectが町のの人に思いを伝えるためのキャンペーン活動を計画し、街の中の多くの店に協力をしていただく。たとえば、2010年度は、環境と食の問題を訴えて、米を食べて環境貢献しよう!ということで、お米中心メニューを考えて、各店舗様に出してもらうというRiceActionキャンペーンを企画実行。そして、2009年度行ったキャンペーンが、TAPプロジェクト関西。多くの店を、生徒達が2~3名のチームを組んで、一軒一軒回って、世界の水事情の深刻さ、それと対照的な日本の水事



情を説明し、TAPプロジェクトを通して、アフリカの水事情の啓発と改善を訴えた。コップ一杯の水で、アフリカにトイレや水道を。この言葉が街のあちこちで、生徒から店の方に投げかけられた。

結局、神戸地区128店舗、大阪地区126店舗、西宮地区47店舗、全部で301店舗を回って、101店舗に協力してもらうことになった。中には、話も聞いてもらえず涙する生徒もいたが、しっかり聞いてくれて、喜んで協力してくれる店も出てきて、世の中の厳しさと優しさを、コミュニケーションを通して体感していき、社会人としての貴重な経験にもなった。

6. イベントで後押し

TAPプロジェクト関西は以下の4か所で行われた。

- ① 2月11日(木・祝)神戸・ハーバーランドモザイク
- ② 2月14日(日)神戸大丸百貨店、元町商店街
- ③ 2月21日(日)関西の中心、梅田のターミナル地下街の、阪急三番街
- ④ 2月28日(日)西宮ガーデンズ

どのイベントも、ブース展示とステージで、世界の水事情啓発と同日開催のTAPプロジェクトへの

参加を呼び掛けた。会場には、世界の水事情や、TAPプロジェクトを紹介するコーナーも設けた。生徒たちは、訪れた人にメッセージをかいてもらう布の展示などを通じて、募金への協力を求めた。高校生らしく、明るく楽しく訴えたことで、深刻な課題が、身近な問題として伝わった。そして、若い世代の真摯な取り組みや呼びかけに、多くの大人の方が共感してくれて、TAPプロジェクトへの参加や節水アクション等、水環境改善活動が町中で広がっていった。そして、「女子高生でもがんばってるんだ。自分達も、TAPプロジェクトでの協力をはじめ、水問題に対して何かできるのではないか。」という思いを、来場者に与えることが出来た。

Blue Earth Projectでのイベントの位置づけは、決して、派手に打ち上げ花火的に集客だけをねらうのではなかった。あくまで、お店の方々にも協力してもらったうえで、それを高校生らしく明るく身近な問題にして訴えるためのイベントに徹した。ただ、結果的にイベントに来て下さったお客様の多さにみんな驚いた。



7. 日本ユニセフ協会での報告会

BlueEarthProjectは、高校卒業後も活動を続けた。具体的には、九州の(株)TOTO本社まで行ったり、松蔭高校まで神戸市長に来ていただいたりして、活動報告会を重ねた。

そして、3月18日(木)、この日はまず、青山にあるレストランで、女優の壇れいさんや有名なシェフの方に交じって、約30社近くの取材陣の前で、緊張しつつ自分たちなりに、TAPプロジェクトの関西での初実施の活動内容を報告した。

その後、ユニセフハウスに場所を移して、300時間に及んだBlueEarthProjectの報告をした。鈴木寛文部科学副大臣にもお越しいただき、プロジェクトベースとラーニング(社会の課題に向けて自分たちで解決を図っていく活動)の成功例として今後多めに広めていきたいと激励していただいた。

自分たちがどのように、店の方々にTAP実施協力を求めていったか。また、町の人たちにどのように世界の水事情の改善とTAPプロジェクトを啓発していったかを報告。最後はユニセフ協会の方や広告会社の方々からも温かい言葉をいただき、報告会は終了した。



報告会の最後で、ある生徒が言った。「高校を卒業してもBlue Earth Projectを続けていきたい世界の水事情の改善に貢献したい。」

この言葉を引き継ぐかのように、2010年度のBlue Earth Projectでは、バーチャルウォーター(大量に輸入する食を育てるのに使われた水)の問題や、関西の水源地琵琶湖の水を汚染する農薬の問題を考え、地産地消で減農薬のエコなお米の啓発活動を行っていくことにつながっていくことになった。

Blue Earth Project 谷口 理